

1. 経営指針書の更新に当たって

NPO法人 丸亀街づくり研究所が設立されて12年目を迎えました。

昨年度はコロナ禍の波がさらに押し寄せてくる中で、利用者たちへのその支援やサポートも形を変えながらも根気のいる関わりだったと思います。まず、この1年本当によくがんばったスタッフの皆さんに感謝を伝えたいと思います。ありがとうございました。

当法人の経営理念である「いのちに寄り添い 心をつなぐ」を法人の判断基準として行動してきましたが、「いのちに寄り添うとはどういうことだろうか。いのちとは何だろうか。また、寄り添うとはどういうことか。まず、誰と心をつながなければいけないのか。」などをさらに深く考えた1年でした。

三木高校のインタビューシップを通して「何のために働くのか。」を深く考える事により、自分自身の生きていくための心の底にある深い理（ことわり、自分自身が大切にしているもの）を考えることになったと思います。

昨年、指針発表会に参加できなかったスタッフの心もバトンもしっかりと一人ひとりが握りしめて、よくがんばった一年であったのではないかと振り返ります。

今回、指針を更新するにあたって「スタッフみんなの声を指針書にのせる」ということを目標にして指針書の更新をしてきました。

今年度加わった新しい仲間たちみんなで力を合わせて共に育ち合いながら、経営理念の実現に邁進して参りたいと思いますので、一年どうぞよろしく申し上げます。

令和4年4月19日

NPO法人 丸亀街づくり研究所

理事長 合木 啓雄

2. 会 社 概 要

- 法 人 名：特定非営利活動法人 丸亀街づくり研究所
- 所 在 地：〒763-0082 香川県丸亀市土器町東8丁目463番地Ⅰ
T E L：0877-85-3323 F A X：0877-43-6929 E-mail：ohisama@atbb.ne.jp
U R L：https://www.machilabo.or.jp
- 設 立 日：平成23年8月5日（設立者 初代理事長 梶 正治）
理事長：合木 啓雄 理事：野口 孝子、木村 光宏 監事：梶 唯史
- スタッフ：15名（令和4年4月1日現在）
- 業 務 内 容
 - ①事業所名：若者独立塾 丸亀おひさま荘
 - ・ 事 業 名：○ 児童自立生活援助事業
 - 一時保護事業
 - 子育て短期支援事業（ショートステイ、トワイライトステイ）
 - ・ 所 在 地：〒763-0082 香川県丸亀市土器町東8丁目463番地Ⅰ
T E L：0877-85-3323 F A X：0877-43-6929 E-mail：ohisama@atbb.ne.jp
 - ・ 設 立 日：平成23年11月1日（初代施設長 入江 正子）
 - ・ スタッフ：5名
 - ・ 定 員：6名（自立援助ホーム 女子3名、一時保護 女子1名、男子2名）
 - ・ ショート：2名（男女2名）
 - ②事業所名：アフターケア事業所 わっかっか
 - ・ 事 業 名：香川県児童養護施設退所児童等アフターケア事業
 - ・ 所 在 地：わっかっか たかまつ 〒760-0063 香川県高松市多賀町2丁目11番地13 2階
わっかっか まるがめ 〒763-0082 香川県丸亀市土器町東8丁目463番地Ⅰ
T E L：087-802-6681 F A X：087-802-6682 E-mail：wakkakka2017@air.ocn.ne.jp
 - ・ 設 立 日：平成29年4月1日（初代所長 合木 啓雄）
 - ・ スタッフ：4名
 - ・ 登 録 者：106名
 - ③事業所名：自立援助ホーム nature
 - ・ 事 業 名：児童自立生活援助事業
 - ・ 所 在 地：〒763-0082 香川県丸亀市土器町東7丁目208番地
ヴェルヴェゾン土器101号室、102号室、202号室、204号室
T E L：0877-85-3375 F A X：0877-85-3376 E-mail：nature@atbb.ne.jp
 - ・ 設 立 日：令和元年11月1日（初代施設長 塚原 育美）
 - ・ スタッフ：6名
 - ・ 定 員：6名（男女6名）
 - ④事業所名：アドボカシーかがわ（仮）
 - ・ 事 業 名：香川県児童養護施設等入所児童の権利擁護に係る実証モデル事業
 - ・ 所 在 地：たかまつ 〒760-0063 香川県高松市多賀町2丁目11番地13 2階
まるがめ 〒763-0082 香川県丸亀市土器町東8丁目463番地Ⅰ
T E L：087-802-6681 F A X：087-802-6682 E-mail：
 - ・ 設 立 日：令和4年4月1日（初代所長 合木 啓雄）
 - ・ スタッフ：4名

3. 我が社の年表

期	年	時代背景	会社の出来事	売上高 経常利益 (万円)	スタッフ数 (人)
1	2011 (H23)	障害者虐待防止法。 橋本徹氏が大阪市長に当選。	NPO 法人 丸亀街づくり研究所設立。 若者独立塾 丸亀おひさま荘 開所。	870 174	4
2	2012 (H24)	自公が政権奪還。第2次安倍 内閣成立。 子ども・子育て支援法成立。	20歳以上女子や発達障がいを持った子や 県外や司法関係からの入所が増える。	1,765 112	4
3	2013 (H25)	子ども手当の名称が児童手当 に戻る。 改正 DV 防止法成立。	初代施設長入江正子氏が退職し、合木が 2代目施設長に就任。	1,802 211	5
4	2014 (H26)	消費税8%スタート。 母子父子並びに寡婦福祉法。	子どもと職員の問題が増える。 若い職員層となるが、離職が相次ぐ。	1,930 218	6
5	2015 (H27)	児童相談所全国共通ダイヤル 「184」運用開始。	通町調査事業実施。 経験ある方の採用を積極的に行う。	2,106 -55	7
6	2016 (H28)	熊本地震。 相模原障害者施設殺傷事件。	丸亀市山北町から丸亀市土器町に移転。 経験ある方達の離職が相次ぐ。	1,790 -441	9
7	2017 (H29)	社会福祉法改正。 子どもの数36年連続減 過去 最低更新。	初代理事長梶正治氏退任。 合木が理事長に就任。 アフターケア事業所 わっかっか 開所。	2,454 555	8
8	2018 (H30)	子ども食堂急増。全国2,000か 所超える。 子どもの自殺 平成で最多。	香川県内の全児童養護施設にて出前講座 開始。 アフターケアの対象者が高松で増える。	2,184 -9	7
9	2019 (R1)	元号が平成から令和となる。 改正児童虐待防止法成立。 消費税10%となる。	一時保護委託児童の利用が増える。 自立援助ホーム nature 開所。 アフターケア事業所 わっかっか 高松事務所開所。	4,362 800	10
10	2020 (R2)	新型コロナウイルスが蔓延。 東京オリンピック延期。	HP 新規作成、パンフレットリニューアル 一時保護の利用が年間67名 コロナ禍での生きづらさが課題。 オンラインの活用が増える。	6,765 1,715	10
11	2021 (R3)	東京オリンピック開催。 新型コロナの脅威が続く。	就業規則の見直し、ブログの連載 ショート年間155名利用。満床が続く。 退所者登録人数100名超える。	7,923 2,392	13
12	2022 (R4)				15
13	2023 (R5)				
14	2024 (R6)				

4. 自社事業分析

① 自社の対象者・支援・サービス・特色とは

現在の支援・サービス	現在の対象者
<p>① 生い立ちや生きる力をありのまま受けとめ、生活や学校や就労において子どもたちの自己実現を支援する。</p> <p>② 社会生活において地域の様々な方たちと協同して幅広く柔軟に対応し、暮らしの相談やお手伝いをする。</p> <p>③ 子どもの声を聴き、子どもの権利を守ることを支援する。</p>	<p>① 地域で子育てのサポートを必要とする概ね0歳から18歳の子どもたち</p> <p>② 家庭で過ごす事が難しい概ね15歳から22歳までの子どもたち</p> <p>③ 児童福祉施設、里親家庭などの社会的養育を経験した人たち</p> <p>④ 児童福祉施設、里親、一時保護所に入所している子どもたち</p>
対象者の求めているもの・人間像	業界内での自社の特色
<p>① 家族と同様の人のぬくもり・愛情</p> <p>② さまざまな生い立ちをありのまま受け入れてくれる温かさ</p> <p>③ さまざまな目線で人として対等に、時には友達や親戚のように接してくれる人</p> <p>④ 利用者が懂れ、信頼することができる大人</p> <p>⑤ 自分の話や声にならない声を聴き、気持ちにできない気持ちを受けとめてくれる人</p>	<p>① 子どもの生い立ちを受け入れ、気持ちや思いをしっかり聴くことで子どもの権利を擁護し、子どもの自己肯定感を高め、将来の可能性を広げる努力を一緒に取り組んでいること。</p> <p>② 障がい手帳を所持していない発達障がいのグレーゾーンの利用者を手厚く支援していること。</p> <p>③ 施設を退所した後もつながりのある大人との関係性があることで社会生活を安心して送ることができる。</p>

② 自社の事業のドメイン（現在の生存領域）

	項目	内容	現 状	何業か現在の定義
事業ドメイン	対 象	どの様な対象をターゲットにしているか	<ul style="list-style-type: none"> 発達障がいのグレーゾーンの中で生きにくさを抱えている人。 信頼できる大人との愛着を必要とする子ども。 施設を退所し、生きづらさを抱えた人 社会的養育を利用している全ての子ども 	自己実現支援業
	ニ ー ズ	対象のどの様な要求に応えようとしているか	育ちや生い立ちや個性・特性を肯定的に受けとめて、生活、就労、家族との課題と一緒に取り組むことで愛着や信頼関係を築いていく。	
	強 み	どの様な競争優位を持って対象に応えているか	退所者が社会生活において抱える課題を、退所前の段階から一緒に考えていくことができる。また、退所後も関係が切れることなく支援しつづけることができる。	

③ SWOT分析（組織の置かれた環境を分析して問題解決策を考える）

		外部環境		
		機会	脅威	
		<ul style="list-style-type: none"> ・子育てやしつけに対して社会が敏感となり、子育てを支える制度への関心が高まっている。 ・一時保護委託の必要性が高いこと。 ・寄付金や寄付物品を頂ける団体が増えてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少に伴い、子どもの人口も減少していること。 ・第2種社会福祉事業では新規参入してくる会社が増える。 ・入所打診が減っている。 	
内部環境	強み	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに熱い思いをもったスタッフの存在。 ・あたたかい家庭料理。 ・関係機関や同友会などの様々な人とのつながりがあること。 ・少人数でスピーディーに動ける。 	<p>①資金も人も投入する積極的な攻勢ゾーン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二つの自立援助ホームの運営の安定を図る。 ・地域の中で仕事を続けながら、地域の方と一緒に子どもを育てていくこと。 	<p>③強みを活かして差別化するゾーン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・民間にしかできない事業を継続しながらも、行政や地域と共に子育てする環境を改善し続けていくこと。
	弱み	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍で活動に制限がかかる。 ・スタッフのメンタルヘルスのケアが不十分 ・経験不足や社会の変化により、支援の質の向上が求められていること。 	<p>②弱みを改善してチャンスをつかむゾーン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国の制度以外での、独自に収益性のある事業を展開すること。 ・スタッフが研修等で支援の質を向上することで利用が増える。 	<p>④致命傷回避、撤退縮小するゾーン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暫定定員が3名以下となり、経営上の運営が厳しくなる。

④ 成長マトリックス

	現在のサービス・利用者	将来のサービス・利用者
サービス	気持ちに寄り添った家庭に代わる養育・相談先	心をしっかりとつないでいくことのできる支援
利用者	家庭でみるのが難しい子ども	地域の中で安心して暮らす為に支援が必要な人

		利用者	
		既存	新規
サービス	既存	<p>①利用者など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭でのさまざまな理由で入所している子どもや施設を退所した子どもたちと愛着関係や信頼関係を築き、自立するために必要な生活スキル、就労、社会性を支援すること。 	<p>③利用者など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童福祉施設、里親家庭、一時保護所等を利用している子どもたち
	新規	<p>②サービス展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・退所してからの自立生活がよりイメージできるようにアパートタイプで一人暮らしにより近い自立援助ホームの運営の安定を図る。 ・全ての子どもにアドボカシーが守られる社会。 	<p>④多角化サービス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども食堂としても活用できる飲食業において、子どもの食生活を支えるだけでなく、就労していくための訓練もできるサービスの展開。 ・発達障がいやグレーゾーンを抱える人を雇う企業へのコンサルティング業。

5. 第11期 令和4年度 決算報告

① 貸借対照表 (2022年3月31日 現在)				単位：円	
科 目		金 額	科 目		金 額
(資産の部)			(負債の部)		
I 流動資産	現金及び預金	51,448,544	I 流動負債	預り金	186,290
	未収金	9,100,616			
	短期貸付金	430,000			
	流動資産合計	60,979,160			
II 固定資産				流動負債合計	186,290
(有形固定資産)	車両運搬具	291,998	II 固定負債		
	その他			固定負債合計	
(無形固定資産)				負債合計	186,290
	その他			資本金	
	固定資産合計	291,998		繰越利益剰余金	61,084,868
III 繰延資産				純資産合計	61,084,868
	資産合計	61,271,158		負債・純資産合計	61,271,158
② 損益計算書 (2021年4月1日～2022年3月31日)				単位：円	
科 目	丸亀おひさま荘	わかっか	nature	計	備 考
措置費・委託費	30,203,900	7,006,000	36,680,823	73,890,723	
寮費			55,000	55,000	
一時保護費	2,139,650			2,139,650	
短期入所費	2,290,350			2,290,350	
会員費・寄付金	238,396			238,396	
助成金	464,000	90,600		554,600	
その他	64,064	12		64,076	
総売上高	35,400,360	7,096,612	36,735,823	79,232,795	
売上原価	1,448,220	108,415	2,085,876	3,642,511	
売上総利益	33,952,140	6,988,197	34,649,947	75,590,284	
給与・賞与	13,087,422	7,384,842	14,214,171	34,686,435	
法定福利費	4,368,256	205,579	465,326	5,039,161	
地代家賃	2,679,464	688,800	2,540,160	5,908,424	
水道光熱費	793,479	76,335	322,437	1,192,251	
通信費	326,584	290,783	211,536	828,903	
その他一般管理費	3,317,777	469,642	469,699	4,257,118	
一般管理費計	24,572,982	9,115,981	18,223,329	51,912,292	
営業損益	9,379,158	-2,127,784	16,426,618	23,677,992	
雑収入	265,928	12	155	266,095	
営業外収益	265,928	12	155	266,095	
雑損失	20,800			20,800	
営業外費用	20,800	0	0	20,800	
経常損益	9,624,286	-2,127,772	16,426,773	23,923,287	

6. 第11期 令和4年度 事業報告
令和3年度 NPO法人 丸亀街づくり研究所 事業報告

事業所名	法人		評価年月日 令和4年3月1日
大項目	中項目	レベル	評価及びレベルアップの方策
経営理念	いのちに寄り添い 心をつなぐ	3	経営理念の実現を目指す過程の中、難しさを感じる一方でその定義や意味などを考えることによって深めることが少しずつできてきたと思う。10年ビジョンをかかげて3年が経過した。明確であると感じるところと分かりにくいと思えるところを整理していきたい。
10年ビジョン	社会貢献活動、あの時はありがとう、地域の中で当たり前で暮らせる社会	2	
経営方針	1、事業展開	3	3事業の運営についてスタッフ不足、人材育成など法人としての課題が明確になる1年であった。また、二つの援助ホームのあり方も次年度への課題として取り組んでいきたい。会社づくりの中の労働環境の整備や社内研修については改善が取り組まれた。ブログの更新など各委員会活動での取り組みは良かった。コロナ禍における地域や社会とのつながりやメッセージの発信は今後の課題になっている。
	2、働きがいある会社	3	
	3、社会的責任	3	
経営計画	数値目標	3	ショートステイにおけるリピーターが増えて収益があがった。付加価値や労働分配率など数字の見方の共通理解は課題となる。
	短期経営目標	3	香川県全域を対象とした活動や利用の領域はショートステイなど広域になってきている。利用者のニーズの把握が必要である。
	①利用者	2	信頼できる関係性の構築に努めているが、法人内スタッフとの関わりがとればよい。満足度ではない指標が必要。
	②業務プロセス	2	業種間の社会的認知の向上ができてきたものの、香川モデルやペーパーレスについてはまだできていない部分がある。
	③学習・成長	2	職員研修は一定の成果を得られた。目標シートの活用や人材育成についてのしくみ化、カバーし合える環境づくりなどが課題となる。
	④財務	3	活用できる助成金を積極活用できた。利用実績は増加している。建物など大きな財務の長期プランが必要となってくる。
	⑤よい企業文化	3	悩みを分かち合い、じっくり話し合えることができてきた。対等な労使関係を構築されつつあるところは伸ばす。
自社事業分析	①自社の特色	3	各々熱い思いをもってがんばっている。人の気持ちを尊重することを重視しようとしている反面、課題解決までがなかなかできていない状況もある。事業所の人数が少ないので話やすいところもあるが、横のつながりが薄いところもあり、スタッフへのメンタルヘルスのケアや配慮が不十分のところも課題である。自己実現を支援していくにあたって、子どもの発達や愛着の成長段階にも目を向ける事が大切であるし、それはスタッフも同様であると言える。成長マトリックスをすすめていく上で、もっと利用者の声を聴きながら、対話を丁寧に重ねていく必要が今後の課題である。
	②事業ドメイン	3	
	③SWOT分析	3	
	④成長マトリックス	3	
総評	<p>今年度を振り返って「いのちに寄り添い 心をつなぐ」ということがどういうことなのかをそれぞれで深めながらの一年であったかと思う。コロナ禍ということによってショートステイや一時保護が多く利用があり、また、自立援助ホームの満床の状態が長く続いた。アフターに関しても目が行き届かない程の登録者の数となった。大きな施設でできないニッチなサービスの提供からリピーターが増え、利用が増えていったことは実績としてあげられる。</p> <p>スタッフ不足の中で法人としての人材育成の課題が明らかになってきたと言える。三つのラボチームからより実働的に活動するように分けた委員会では横のつながりも大事にしながら、広報活動、寄付、研修と持ち回り制などを取り入れながら、スタッフ個々の強みをみることでできた。労働環境においては就業規則や有休休暇の取得など、これまで取り組むことができていなかった課題に取り組み、対等な労使関係に少しずつ近づいてきたのではないかと思う。</p> <p>制度のはざまの支援の充実を図るためには、まずスタッフみんなの心の安定とやりがいをもてることにより一層力を入れていかなければならないと考える。今後の事業の方向性を考える上でも今のままでいいのだろうか利用者も含めて法人としても自問自答を繰り返しながら試行錯誤して進んでいきたいと思う。利用者の声なき声を聴き、気持ちにならない気持ちにも寄り添うことができるよう全社一丸となって小さなことからひとつずつできることを積み重ねていきたいと思う。</p>		

令和3年度 研修委員会 活動報告

事業所名	研修委員会		評価年月日 令和4年2月1日	
大項目	中項目	レベル	評価及びレベルアップの方策	
目的	研修に参加する事で知識を高め、開催するにあたってはスキルを惜しみなく提供する。また、それらを日々の支援・生活に活用して実践する。学べる事に喜びを感じ、自己研鑽に励むことを目的とする。		3	今年度はリモートでの研修ばかりであったが、学びの多い1年であった。学びの共有の報告では有意義であったことを感じられる発表が印象に残っている。せっかくなので、日々の支援・生活に活用できた！という報告があればよかったと感じている。
内容	OJT研修	4	事業所内でのOJTができる場所とそうでないところがあるので、法人スタッフ会前のOJTがありがたかった。	
	法人内研修	3	スタッフ(他事業所)→利用者の研修は実現できなかった。1年で全スタッフが研修をする事ができなかったため来年度も引き続き行なっていきたい。PCAGIPは定期的に行うことでスタッフの悩みの共有ができるので継続していければと思う。	
	外部講師研修依頼	3	今年度は1回の開催となったが、すぐに支援に取り入れることができ、事業所内での振り返りをする機会となった。研修後の外部講師への相談する時間をもつことで、支援の手助けが得られたのではないかとと思われる。	
総評	<p>1年を通しての活動内容としては、依頼することばかりで、委員会としての役割の必要性を感じる事はあまりなかった。</p> <p>法人内研修を全員しなくてはいけないのか？など来年度どうするのかは考えていく必要がある。少しずつレベルアップをはかりながら、スタッフの専門性を高めていければよい。</p> <p>OJT研修に関しては、ほとんど関与しておらず、どのようなことが行われていたのか、内容等を知る機会があればよかったように感じている。</p> <p>法人として、スタッフの研修は必要不可欠なものなのでよいものは継続していければよい。</p>			

令和3年度 労働環境委員会 活動報告

事業所名	労働環境委員会		評価年月日 令和4年2月1日	
大項目	中項目	レベル	評価及びレベルアップの方策	
目的	各スタッフの悩みごとやストレスチェックをすることを通して、スタッフの労働環境をよりよくしていく事		2	事業所によって違うので、なちゅれは質量が多かった。おひさまは事業所内で話し合う環境が多い。なちゅれは、変化すべきであるがそれに到達していない。メンバーが変わるので少し変わるかなと思う。
内容	スタッフのストレスチェックシート導入	3	資料を複数提示し検討を委員会でやってみた。研修の中で取り入れてみたが、ストレスチェックシートの必要性をまだスタッフには理解してもらえていないので今後の課題ともなる。	
	悩み事を聞きます制度	3	各事業所でそれぞれ悩みを話す場があったように思うが本来、幹部の人間がすべきではないだろうか。幹部と委員会と一緒に動くようにする。	
	健康診断を必ず受ける制度	3	9月までに次年度みんなが受けられるように取り組みたい。委員で取りまとめて予約を入れる方法をとってもいいのではないだろうかとも思う。	
	有休休暇取得できる制度	2	各事業所に委員がいるので、有休休暇を取得できているのか確認をする機会があり良かった。実際、自分たちの希望通り有休が使えているのか、年間5日取得ができているのかは把握できていない。	
	人材確保、採用	2	職安、福祉人材センター等に求人を出すことはしたが、新卒採用はできたが、随時の採用が思うようにならない。応募はあるが、なかなか見極めが難しい。	
	規程について見直し	3	規定について社労士さんを雇い見直しができたように思う。月1回委員会を実施し就業規則を各事業所の実態に応じて見直し改善ができた。	
総評	<p>月1回委員会を実施し就業規則を各事業所の実態に応じて見直し改善ができた。ストレスチェックについても、資料を複数検討し提示しいい感じだったと思う。委員会で話し合ったことをおひさま荘では、おひさまスタッフに随時報告して意見をもらい、次の委員会に参加をしている。定期的な課題の検討を重ねてきた。委員会の役割が明確になってきた。課題としては、労働環境と言うフィールドがとっても広くて点検しきれない領域があるかもしれないこと、それには通常業務プラスでできることに限りがあること、委員以外のスタッフから意見を吸い上げる仕組みが不十分なことがある。</p>			

令和3年度 広報委員会 活動報告

事業所名	広報委員会		評価年月日 令和4年2月1日
大項目	中項目	レベル	評価及びレベルアップの方策
目的	対外に受けた法人としての発信について、業務を行う。活動を発信し関心を寄せてもらうことで社会的信頼度を向上させ、風通しの良い法人をつくる。	3	社会的信頼度がどこまでのものなのか、指標もないので分かりづらい。Googlemapの検索がたくさんされていることから、数年前に比べたら関心を持ってきている人も増えているように感じる。
内容	googleマップの位置表示についての	4	Googlemapの検索がたくさんされていることから、数年前に比べたら関心を持ってきている人も増えているように感じる。
	通信の発行年間2回のとりまとめ	4	みんなの協力でできた。筆まめの整理が必要になり、各事業所にて管理になる。
	HPのブログの更新のとりまとめ	4	事業所単位で更新でもいいと思うので、来年度は移行期間にしていくのもあり。HPの閲覧者数なども法人内で共有できそう。
	そのほかブログ等で発信したいこと	4	見てほしい人に届くのはいいが、不特定多数の人が知ることのリスクもあるので難しい。
総評	<p>今年度ブログの更新を毎月担当制で回して、すべてのスタッフに協力してもらい毎月更新することができたのは良かった。ブログが更新されていると社会的信頼度も上がるのではないかと考えているので今後も継続していくべきだ。また、通信の発行についてもどれだけの効果があるか分からないが、HPのアクセス数が伸びているので、積極的に発信していくことで関心を寄せてもらうことができる。</p> <p>通信の作業については、出勤しているスタッフや、おひさま荘の子どもたちも手伝ってもらいながら作業した。通信の郵送先については、今後事業所単位での管理になるので通信の編集作業や印刷作業は担当者をつけて各事業所で把握ができるようにしていれば委員会という形で複数のスタッフがいないでもいいのではないかと感じた。</p> <p>今後は、広報を通して寄付のお願いと、そのお礼をきちんとやっていくことが課題だと感じている。</p>		

令和3年度 まちらば向上委員会 活動報告

事業所名	まちらば向上委員会		評価年月日 令和4年2月1日
大項目	中項目	レベル	評価及びレベルアップの方策
助成金の情報、申請を発信し共有する	助成金の情報	2	情報の仕組みが分からない職員が多数あり共有の強化していく必要がある。
	申請書の発行	2	申請のやり方を分からない職員や情報が行き届いていなかった。
	助成金の共有	2	そもそもやり方がわからない職員がいるので共有して周知していく必要がある。
赤い共同募金の共有	申請書	2	一職員が独断申請を出来ない状態で窓口が必要。
	街頭募金の共有	4	周知はできていたが年に1回しかない。
まちらば基金の管理	基金の管理	4	広報を発送した後大量に基金があり平均的な基金があれば助かる。
	営業	1	コロナ禍で出る事がなかったが一人一人名刺、パンフレットを持っておく必要がある。
防災管理	おひさま・nature	4	避難先の見直し、作成をする事ができた。
	わっかっか	4	避難先の見直し、作成をする事ができた。まちらば委員会がないので実施が難しい。
	各連絡網	2	おひさまから近い順に作成しているがナチュレ、わっかっかでの事故があった場合の想定を考えなければならない。
自治会	おひさま・nature	3	掃除に参加できたがコロナ禍で少なかった。
総評	<p>まちらば委員会：コロナ禍で外に出る機会が無くイベントが激減し合同でする事がなくなつた。外出には何回か行って営業の機会の場面がありパンフレット、名刺を渡すチャンスがあったが持ち合わせていなかったのでチャンスを生かせるように職員に周知していく。</p> <p>法人：来年度こそ県外外出をさせたい。スタッフの幸福追求のできていないのでメンタルヘルスの徹底を行う。</p>		

令和3年度 若者独立塾 丸亀おひさま荘 事業報告

事業所名	丸亀おひさま荘		評価年月日 令和4年2月1日
大項目	中項目	レベル	評価及びレベルアップの方策
事業目的	一時的に養育の難しい場合や様々な理由で家庭生活が困難な子ども達に、安全で安心できる生活が送れるように支援することを事業の目的とします。	4	・年齢にあった支援を行なうことができた。様々な環境で生活してきた人達の間での誤解、意見の行き違い等があり不満が出る事があった。もっと個々に丁寧な支援が必要だったように思われる。
行動指針	① 快適で清潔な空間を提供し、細やかな心遣いで安心して過ごせるようにします。② 人と人との信頼関係を大切に、チームワークで支援に取り組みます。③ 幸せを引き寄せる力のある笑顔をたくさん増やします。	4	・日常の生活を過ごす中で安心感を持ってもらえたと実感する事が出来たが、個々の信頼関係を築くには、日常の生活に流されることが多くあった。今後は個々の関わりを重視していくように心掛けるようにする。
ビジョン	・身体も心も健康で幸福感を高める。 ・スタッフ間の信頼関係を強固なものにして支援にいかせる。 ・社会的により認知され、自立後に生きやすい社会になる。	4	・コロナ禍で行事が少なく、外出する機会が少なくなった。気分転換やストレスの発散に苦慮した。今後も発散方法を考えていく必要がある。スタッフ間では短時間でも話し合いの時間を取るようにしてきたため、以前より関係が良くなったように思われる。
事業内容	①生活支援	3	コロナ禍の中、毎朝検温をし体調管理を行った。不調を察知し早い対応へと繋がった。今後も続けていく。
	②アフターケア	3	年少児が居るとどうしても日常の生活に追われることが多く、その状況の中で年長者へどう関わっていくか、どう支援すれば良いかを考える事が多く、苦慮した。また様々な生活環境で過ごしたことで、自己肯定感が低い者も多く、承認することで自己肯定感を高めていく支援を心掛けた。
	③スタッフ間の連携	4	アフターケアでは退所者の同行はSNS等を活用し、関係を絶やさないように心掛けてきた。今後も電話、SNSを利用していく。スタッフ間は短時間でも話し合う時間を作り、感じた事、分からない事等を話し合ってきた。スタッフ間の関係が以前より良好な事がきめ細やかな支援へと繋がっているように思われる。
	④地域とのつながり	3	コロナ禍で行事、地域活動に参加する事が減り、おひさま荘独自の活動も考えていく事が必要だと思われ、外出時にゴミ袋を持参しゴミを捨てるなどコロナ禍でもすぐに出来る事を考えて実行していく。
レベルの合計点		25	
総評	<p>コロナ禍のなか、感染者を出す事無く健康に過ごすことができた。PCR検査、抗原検査を利用し、クラスター対策にも力を入れてきた。そして、コロナ禍の為規制も多く、不満を持ちつつ日常生活を送っており、今後ストレスの解消方法も考えていく必要があると思われる。</p> <p>年齢にあった支援を心掛けてきた中、環境面では配慮できたように思われる。様々な生い立ち、生活環境の中で育ってきた事に思いをはせた支援を心掛けた。また、自己肯定感を高めることに重きを置いた支援も心掛けてきた。利用者間では、環境及び生活習慣の違いからくるトラブル、意見の行き違が多々あった。その事に苦慮する事も多かった。自己発信の強い者に手を取られがちになり、弱い者に対し二番手になりがちになる事もあった。発信の弱い者にこそ細やかな心遣いで接することが大事だと思われた。今後も手厚い支援へと繋がっていきたい。入所、一時保護、ショートそれぞれが、それぞれに対する思いがあり、その事への支援に難しさを感じた。スタッフが間に入りそれぞれの考え、思いを聞き、寄り添う事で、関係が緩和できたと考える。それぞれの思いに寄り添っていく事を念頭に置き、支援していく。</p> <p>スタッフ間では、会議、引継ぎを含め沢山の会話を行ってきた。話しを重ねてきたことでお互いの思いを感じる事が出来た。またスタッフ間の関係が利用者にも影響するのではと思われ、関係が良ければ支援の厚みにも繋がっていき寄り良い支援ができるように思われる。今後ともスタッフ間の繋がりを強固なものにしつつ、利用者へ寄り添った、きめ細やかな支援を続けていきたい。</p>		
利用実績	<p>・入所： 19名/年（初日在籍） 実人数 4名</p> <p>・一時保護： 68名/年 実人数 63名</p> <p>・ショート： 155名/年（内訳）高松 54名、丸亀 52名、綾川 32名、三豊 8名、善通寺 4名、宇多津 3名、観音寺 1名、坂出 1名</p>		

令和3年度 アフターケア事業所 わっかっか 事業報告

事業所名	わっかっか		評価年月日 令和4年2月1日
大項目	中項目	レベル	評価及びレベルアップの方策
事業目的	児童養護施設などの社会的養育に関わる施設を退所した方たちを対象に、自らの人生を主体的に生きることができるようサポートし、誰もが生きやすい社会をめざすことを事業の目的とします。	4	登録人数も増加しているため、関わりの整理を行った。しかし、退所前から関わりのある子は連絡を取り合えるが、退所が決まってから関わるようになった子はなかなか本人からの連絡が少なかったりする。そういった声をあげていない人たちへの関わりが手薄になってしまっていると感じている。また、ふらっと気軽に遊びに来てもらう時間がない。「遊びに行ってもいい？」という声にこたえることができていないのが現状である。「主体的に生きる」「エンパワメントされる関り」は難しく、今後もスタッフの専門性の向上、論議することが必要である。
行動指針	① 利用者主体的+0エンパワメントされるサポートをします。 ② より良いチームで支援、体制強化・向上。 ③ 社会的養育と社会をわっかっかでつなげ、誰もが生きやすい社会	4	スタッフ間では連携がとれているし、お互いにヘルプが出せるのはいいことであるため、今後も協力してチームで活動していくように心がけていたい。文言としては暮らしのサポートの方がしっくりくるため、文言の見直しが必要である。
ビジョン	・安定した収入。 ・若者や大人へのサポートも充実している社会 ・主体的でより豊かな生活を送る。	3	スタッフ間では連携がとれているし、お互いにヘルプが出せるのはいいことであるため、今後も協力してチームで活動していくように心がけていたい。文言としては暮らしのサポートの方がしっくりくるため、文言の見直しが必要である。
事業内容	①相談支援・日常生活支援・就労支援	4	<p>コロナ禍が続き、宅配の回数が増えた。同時にサロンが開催できなかつたり、集まることができないのは残念だ。誰かがいてふらっと立ち寄れる場所にできたらいいと思うが、日々の訪問・同行業務で時間が取られている。しかし、一方で、アウトリーチの活動が根付き、スタンダードになっているともとれる。どちらか一方ではなくバランスを見ながら計画していきたい。</p> <p>退所後の金銭管理はすごく難しい。今までに得てこなかった金銭感覚や、働くことに対してそもそもエネルギーがないことなど、生活をする事自体への意欲や動機付けに躓くことが多い。引き続き、根気よく長期的な視点を持って彼らに関わることが求められている。また、その時、その人によって管理の仕方も見直す必要があるのかもしれない。</p> <p>他には、子どもの未来応援基金を利用し、学習支援が家庭の中に入れたことで、自宅への訪問もできたことは、新しい形での支援ができたように感じている。適宜、助成金なども用いながらその人、その家庭に合った支援体制を整えていけるように工夫したい。</p> <p>初対面の面談はハードルが高いので、はじめに関係づくりをしたい。そのための工夫がいる。</p>
	②居場所づくり	4	
	③退所前支援	3	
	④体制強化と職員の専門性・資質向上	3	
	⑤社会との繋がり	3	
レベルの合計点		28	
総評	<p>施設を退所して本人の暮らしがベースにあり、そこに寄り添う形でわっかっかの支援があるのだが、それだけではカバーしきれないところを感じていた。しかし、本人の生活の中に、他の人と一緒に生活をするという形で仕事や生活、育児が一人の時よりも安定するところを今年度は多くみることができた。必要な人すべてに同じような環境を与えられるわけではないが、人生の流れの中で出会い、生活形態が変わっていく様を見ることができ、それが少しでも豊かであれば何よりの前進だと思った。もちろん、いいことはばかりではなく、悲しい時も苦しい時も生まれてくるのだが、そんな時にわっかっかができることは何だろうと、ひたすらに考え、本人と共にアクションしていくことしかできないと感じている。</p> <p>施設を退所してからも生い立ちに悩み、躓くことは多くある。わっかっかだけで解消したり、解決できないことばかりである。児童相談所や各施設との協働は大前提であり、その他にも共同できる人や機関とつながっていくことが必要だと感じる。そのためにも、相手の立場を理解し、役割を認識していなければいけない。</p> <p>また、今年は命のはかなさにも触れることになった。大変痛ましくつらいできごとだった。生活に寄り添うということは、本人たちがどんな価値観でどんな風に物事を見て、どんなふうを感じているのかは、その本人たちから発せられる言葉からでしか受け取ることができない。だから対話することを大切にしなければいけないし、発せられる言葉をしっかりと受け止めることを繰り返していかなければいけない。そのためにも私たちが彼らにとって安心する存在である必要がある。</p> <p>子どもたちにとっての最善の利益を優先させることと、子どもたちに寄り添い主体性を尊重させることには葛藤が生まれるわけだが、その葛藤の渦中にいらればいいと思う。</p>		
利用実績	<p>・登録者 109名 ・LINE 4,183件/年 電話 713件/年 訪問同行 1,051件/年 来所 338件/年</p>		

令和3年度 自立援助ホーム nature 事業報告

事業所名	nature	評価年月日	令和4年2月1日
大項目	中項目	レベル	評価及びレベルアップの方策
事業目的	利用者がスタッフたちと縁をひとつひとつ丁寧に紡いでいき、人の想いを感じて生きていこうと思える経験を積み重ねることを事業の目的とします。	3	<p>事業目的は他事業所と比べるとぼんやりしたものではあったが、natureの利用者にはとても大切なものであった。兼務スタッフがいることで関わりが多様であること、自分と向き合う機会がどの利用者にもあったことで様々な出来事を通してたくさんの経験ができたのではないと思われる。</p> <p>行動指針においては、良くも悪くも支援者自身がモヤモヤしたり、支援のずれを感じるが多かった。利用者も同じように感じていたかもしれず、利用者の変化に合わせての支援の仕方も必要であったと感じている。</p>
行動指針	① 利用者もスタッフも夢をかかげ何度でもトライアンドエラーを繰り返します。② スタッフは利用者とお互いに信頼できる関係性を結びます。③ スタッフ同士互いの関わりを認め刺激しあいながら専門性を高めます。	2	
ビジョン	・humming natureでは退所者が帰ってきた時に、今の自分の生活や退所 してからの失敗談、楽しかった事などを語る場を設ける。語る事により退所者は自信を持ち、入所者は退所後のイメージを描きやすくなる。・労働環境を見直す事で、誰もが働きやすい職場となるようにする。・保護者とスタッフが関係を築く事で、保護者と利用者の関係性が良好になるように保護者の心の安定を目指す。	2	
事業内容	①生活・巣立ちのための支援	2	
	②関係機関・家庭との連携	3	
	③心の育ちへのアプローチ	3	
	④退所者へのアフターケア	2	
	⑤スタッフのチームワークと専門性の向上	3	
レベルの合計点		20	
総 評	<p>特に生活支援に行き詰まりを感じ、支援方法を模索し続けた1年であったように思われる。ゲームやスマホの依存により生活の乱れが顕著で、登校できない、バイトの継続できない、昼夜逆転の生活になってしまう。生活が整わないことでの心身の不調も多くみられた。その時に合った支援をしていたが、利用者の納得を得ることができず、なかなか改善に繋がることなかった。支援とはどこまですればよいのかと考えさせられた。短期的ビジョンは共有できていたが、中長期的ビジョンの共有ができなかったことが反省点である。natureスタッフがベクトルを合わせていくことで改善していくことができるように感じている。また利用者同士のトラブルも頻繁にあり、一時保護になるケースもあった。支援者の目の届かないところでのことが多く、声があがってこなければ見過ごしてしまわれていたのではないと思う。高校生の学習支援の充実により、定期考査の成績が上がったり、大学進学という実績ができたことはとても嬉しかった。支援者不在時の学習はとても難しい環境なのが課題のひとつでもある。</p> <p>業務に携わるにあたって、人間関係の難しさ、有難さを感じる1年であった。スタッフ不足による日常業務の圧迫で孤独を感じたり、支援そのものにあきらめを感じたり、利用者からの不満をキャッチしづらい状況であった。アパートタイプでの事業運営の課題を来年度は1年をかけて考えていきたい。また、ビジョンを利用者と一緒に描く時間も多く持ち、来年度は支援者自身、利用者の行動を感情レベルでみるのではなく、客観的であったり、俯瞰する事により支援の質の向上に努めていきたい。</p>		
利用実績	<p>入所児童 63名/年(初日在籍) 実人数 6名</p>		